

会員交流が湘現会を支える原動力！

「ホームページ・会員交流コーナー管理人の青野です」と、5月29日、実にウィットの富んだ書き出しで、青野さんらしい人柄が滲み出ているメールが我々に届けられました。

スタートは会員の小高さんからのご提案で、「会員交流の場」を設けたら如何なものかとのアドバイスもあり、青野世話人が即対応をされ、実にスムーズな流れで展開されております。

ここ4～5月にかけて、桑原代表から、会員さんへの「ご機嫌伺い」も、「湘現会の生え抜き」で、27年の年輪を持つ「超ベテラン」として、さらには「お声かけの天才」として、流石と思わせる行動が、「青野管理人とのコラボ」とも相まって「息もピッタリ！」で、実に見事な成果を発揮しております。

さて、「湘現会の行事などは2月からほぼ全滅状態」なるも、先般「緊急事態宣言解除」との政府見解があるものの、予断を許さない状態であることは全く変わりありません。

「神奈川県の方針」も、二転三転、まさに日々、目まぐるしく変わろうとも、長い人生を逞しく、我が道を切り開いて来られた会員さんには、「泰然自若」の心境ではないでしょうか。

そうは言うものの、私自身は、皆さんと違い、「短命家系」なるが故（ゆえ）に、かつて在籍した会社の50歳時に、「60歳定年後の過ごし方」のセミナーがあり、「65歳まで命持てば本望」と、かつ「好き放題に生きて」と言い放ち、インストラクターを困らせたことが思い浮かぶも、リタイア後、「5年日誌」も、今年から4冊目に入り、「相変わらずの生き様」で、皆さんの温情にすがりながらも、お陰様で生き永らえております。

本原稿を書きつつ、横目でテレビ放映を眺めていたら、作家・五木寛之の「大河の一滴」が話題になっており、あらすじは、どんなに前向きに生きようとも、誰しもふとした折に、心が萎えることがある。

だが本来、人間の一生とは、苦しみと絶望の連続である。

「そう“覚悟”するところからすべては開けるのだ——」と、皆さんも既にご存じの内容でしょうが、改めて思いを噛みしめております。

さて、「6月の定例会」も、「会場利用など」で、いろいろと制限もあり、中止せざるを得なくなってきましたが、自分の性格としても「座して待つという言葉」が、頭からすっぱり抜けて、延期の、6月23日（火）午前9時からの「みんなで唄おう！」を、不安材料を取り払い、まず実施に漕ぎつけ、半年振りの出会で、「密の会話」はままならずとも、マスク越しに、目で物言いながら、無事を喜びあえればハッピーでしょう。

石川リーダー、ピアノ演奏の山内先生、サブリーダーの山岸さんも、個々にはいろいろとありながら、「前準備万端怠りなく」、皆さんにお会いできるのを楽しみにしております。

かつ、「リーダーの念願」でもある、課題曲＜花が咲く日は＞を、新宿の歌声喫茶「ともしび」で、「我が湘現会！ここに在り！」と、「伸び伸びと、唄える日」が来ることを夢見つつ、お互いに励みましょう。

私も、これからの一年間は、「この指止まれ方式」の「^{いち}一担当者」としても、毎月、何らかの形で、「お互いに会える場」を作り出せばいいと思いつつ、無い知恵を絞ってみたいと考えていますので、ご支援の程よろしくお願いいたします。